

実践報告

主体性・社会性をはぐくむ幼児キャンプの実践報告
－「大自然に“いっぽ”～冬～」の実践を通して－
A Report of an Infantile Camp Which Cherishes Autonomy and Sociality
－Through the Practice of “Daishizen ni Ippo -Winter-”－

庄子 佳吾 SHOJI Keigo
国立花山青少年自然の家

松川 仁紀 MATSUKAWA Masamichi
国立花山青少年自然の家

キーワード
幼児、キャンプ、自然体験活動、感性

要旨

現在、重要な教育課題として幼少期に具体的な生活体験や自然体験が欠けていることが指摘されており、自然体験活動の機会の拡充が求められている。こうした現状を踏まえ、国立花山青少年自然の家では、幼少期の子どもたちに自然体験活動の場を提供し、主体性・社会性をはぐくむ幼児キャンプ「大自然に“いっぽ”」を実施している。本事業は、人と自然・人と人とが関わりながら生活することで自主性や積極性・協調性の向上を図ることをねらいとしている。平成24年度は前年度より継続して「大人が誘導しないキャンプ」による有効性を検証するとともに、新たな調査を取り入れ、実施した。本稿では、幼児と保護者それぞれ分かれて実施したプログラムの実践の過程、保護者や参加者のアンケート結果を通して得られた、成果と課題、今後の展望について報告する。

Ⅰ. はじめに

現在、重要な教育課題として幼少期に具体的な生活体験や自然体験が欠けていることが指摘されており、自然体験活動の機会の拡充が求められている。⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾特に学齢期の子どものみならず、より低年齢にあたる幼少期の教育の重要性が認識され、人間形成の基礎が培われる時期の自然体験活動は従来のように特定の領域にかかわるものではなく、あらゆる領域より子どもの健やかな成長を支える大切な役割を担っていると捉え直されている。⁽³⁾これは、中央教育審議会答申⁽²⁾でも、現代の子どもは「テレビゲームやインターネット等の室内の遊びが増えるなど、偏った体験を余儀なくされている」としており、幼稚園教育における自然体験活動が重要視されていると推察できる。これは、教育内容にて、整合性が図られている保育所保育においても同様であり、子どもの発達に

おいて自然体験活動は非常に重要なものであるといえる。そのため、幼少期からの自然体験活動を通し、幼児が他者とのかかわり合い、基本的な生活習慣や態度、人とのかかわる力等を確実に育み、学ぶ場が必要となる。

また、上記のように子どもの自然体験活動への参加が重要視されるようになって久しいが、レイチェル・カーソン⁽⁴⁾は「こどもの『センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目を見はる感性）』を新鮮にたもちつづけるためには、世界のよろこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動をわかち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があります」と述べている。つまり、子どもが自然体験活動をする上で、近くで見守ってくれる大人が必要だということであり、幼少期の子どもにとって保護者がその役割を担うべきであると考えられる。

こうした現状を踏まえ、国立花山青少年自然の家では、幼少期の子どもたちに自然体験活動の場を提供し、主体性・社会性をはぐくむ幼児キャンプ「大自然に“い〜っぱ”」を実施している。

本事業は平成16年度の幼児お泊り会を前身とし、8年目の継続事業である。平成20年度までは、幼児及び小学校1・2年生を対象としていたが、平成22年度より幼稚園・保育所・保育園の年中・年長児を対象を絞って募集することにした。また、事業開始当初から、幼児と保護者それぞれのプログラムに分かれて実施しており、人と自然・人と人とが関わりながら生活することで自主性や積極性・協調性の向上を図ることをねらいとしている。

平成23年度からは、秋と冬のキャンプの1ヶ月前にプレキャンプを計画し、幼児参加者の不安を少しでも取り除くように配慮した。保護者にも事前に場所を把握してもらうとともに、事業内容への理解を深めてもらうように努めた。このアイデアは幼稚園の先生方からいただいた意見であり、今後の幼稚園行事としてのお泊り会企画に情報提供している。それに併せて、事業のねらいを変更し、以下のことに焦点を絞って企画した。

【子どもプログラムのねらい】

①「大人が誘導しないキャンプ」

子どもの主体性を育む手段として、本部から子ども達への一斉指導は一切行わず、カウンセラーが子ども達の行動を支援するスタイルの「フリーキャンプ」を目指す。

生活体験を中心に、子ども達が自ら「やりたい」ということを選択できるようにし、大人は指示するのではなく、子どもの行動を受け入れてサポートする。スタンスとしては「一緒に生活しながら子どものペースに合わせる」。

②「ひとりではできない体験や遊びを通して、子ども同士が交わりをもつ」発達段階的に、幼児期は放っておけば個々の活動になる。だからこそひとりではできないことや協力しなければできないことを仕掛け、子ども達がどう行動するかを観察する。

【保護者プログラムのねらい】

③「体験したことのない活動の提供」

「親が体験したことがないことは子どもには体験させない」という仮説を立て、親による体験をしてもらい、子ども達に与えていく

ように働きかける一歩となる活動を提供する。

④「季節感のある“食”について考える」

東日本大震災を機に、安全な食について考える機会が増えた。大人として、親として、子ども達のためにできることを考え、生活体験の中でも必要不可欠な食に焦点をあてて、参加型活動プログラムを実施する。

また、本事業では、平成18年度から当施設で作成した調査「自立についての調査項目」を用いて、体験活動が幼児の自立的発育にどのような効果をもたらすのかを客観的に評価し、次年度の事業計画に活かしてきた。平成23年度からは事業のねらいも変更したことにより、調査に関しても見直しを図った。子どもプログラムにおいて取り組む「大人が誘導しないキャンプ」において、誘導しない体験がカウンセラーにどのような影響を与えるのかを記録として残すために、事業後に感想文を書くこととした。また、参加した保護者にも協力してもらい、フリーキャンプが子どもに与える影響を調査するため、事業後の家庭における子どもの様子を記録してもらった。これらの記録は、内容を分析し、本格的に調査することが可能かどうかの判断材料にしていくことを検討している。また、調査のための尺度を作成する上での予備調査として、活用していく方針である。

こうした過去の知見を活かし、平成24年度は前年度より継続して「大人が誘導しないキャンプ」による有効性を検証するとともに、新たな調査を取り入れ、実施した。

本稿では、平成24年度に実施した「大自然に“い〜っぱ”～冬～」より、事業の概要、保護者や参加者のアンケート結果などについて報告を行う。

II. 事業の概要

1. ねらい

幼児が、自然を介した学びの場において、自立心や協調性をはぐくむ。また、その保護者が実習や講義を通して、幼児期における自然体験活動の意義について理解を深め、日常での子育てにつなげる。

2. 目標

(1) 子ども参加者

- ・ 家族と離れ、1泊2日のキャンプに参加できる。

- ・自然の中での活動やはじめての体験に、挑戦することができる。
 - ・自分でできることは自分でやろうとすることができる。
- (2) 保護者参加者
- ・幼児期の自然体験活動の意義について、理解を深める。
 - ・体験したことについて、子どもと意見を共有し、子どもの成長を見守る。

3. 概要

【実施期日】

- (1) プレキャンプ：平成24年12月15日（土）日帰り
- (2) 本キャンプ：平成25年1月12日（土）～13日（日）1泊2日

宿泊日程については冬季における幼児の体力・健康面と祝日等の日程面を考慮し、1泊2日に設定した。

【実施場所】

国立花山青少年自然の家及び施設周辺フィールド（宮城県栗原市）

【宿泊形態】

本キャンプにて、幼児と保護者はそれぞれ以下の場所に宿泊した。

幼児：施設内でのテント泊（テント設営は保護者が行なった）

保護者：宿泊室での宿泊

【対象】

幼稚園・保育所・保育園年中・年長児とその保護者

【募集人員】

幼児20名とその保護者

【講師】

馬渡 達也 氏（多世代はうす 文字倶楽部代表）

【参加者数】

参加者数・内訳は下記、表1にまとめたとおりである。

4. スタッフ人員

(1) プレキャンプ：

国立花山青少年自然の家職員6名・山形県神室青少年自然の家職員1名・国立花山青少年自然の家ボランティア2名（男7名女2名）

(2) 本キャンプ：

講師1名・国立花山青少年自然の家職員6名・国立花山青少年自然の家ボランティア4名（男8名女3名）

Ⅲ. 事業の実際

「大自然に“い～っぼ”～冬～」のねらいの達成を目指し、活動内容やスケジュール以外で、子どもプログラム担当スタッフの役割として以下の5点については講師、スタッフ間のプログラム開発会議の上、事前に決めた。

- ① 子どもたちを誘導せず、一緒に遊んだり話を聞いたりする。
- ② ほぼ一斉指示を出さない(子どもを集合させない)ので、わからないことがあれば確認する。その際、子どもは1人にしない。
- ③ 意図的に誘導はしないが、放任ではない。子どもたちにきちんと情報提供をして、選択肢を与える。また、活動に必要な説明もしっかりと行う。
- ④ 生活に関する部分(着替えなど)以外については、担当する子どもも事前に指定しない。活動を通して、関わりをもった子どもを見守っていくようにする。
- ⑤ 担当する子どもが途中で変わることはあるが、基本的に担当2人で4～5人の子ども⁽⁵⁾を見るようにする(特に安全確保については最大の配慮を)。

上記の内容について、前日にカウンセラーのボランティアとともに、ケーススタディやロールプレイを行い、当日に講師と最終確認を行う流れで、トレーニングを繰り返した。また、プ

表1 参加者内訳

参加者内訳 (プレキャンプ)					県別参加者内訳 (プレキャンプ)				
子ども参加者		保護者参加者		合計	県名	宮城県	岩手県	山形県	合計
年中	年長	保護者	兄弟姉妹						
男	3	5	6	1		29	3	3	35
女	4	3	10	3					
				20					
参加者内訳 (本キャンプ)					県別参加者内訳 (本キャンプ)				
子ども参加者		保護者参加者		合計	県名	宮城県	岩手県	山形県	合計
年中	年長	保護者	兄弟姉妹						
男	4	5	9	6		45	2	3	50
女	5	4	13	4					
				24					
				26					

レキャンプにおける子どもたちの行動観察記録を、全員で情報共有するなど、「子ども理解」と「フリーキャンプの効果」に焦点をあてて、スタッフも意識を高めた。

1. プレキャンプ

本キャンプに向け、日帰りという限られた日程の中で、子どもと保護者が自然な流れで離れること、雪の中での活動や季節感を存分に味わってもらおうことを主たる目的とした。プログラムについては、表2にまとめたとおりである。

表2 キャンププログラム（プレキャンプ）

【子どもプログラム】	
12月15日（土）	
午前	○受付 10:00
	○『森のクリスマス飾りを探そう』 10:30～
	○『おともだちとおひるごはん』 12:00～
午後	○『クリスマス飾りをつくろう』 13:00～
	○『みんなでクリスマスパーティー』 14:30～
	○『おわりの会』 14:50～
夜	

【保護者プログラム】	
12月15日（土）	
午前	○受付・子どもとお別れ 10:00
	○『い〜っほcafé』 10:30～ (事業説明・パーティー準備)
午後	○『い〜っほの子育て座談会』 13:00～
	○『みんなでクリスマスパーティー』 14:30～
夜	○『おわりの会』 14:50～

受付後、保護者には子どもとお別れの儀式をし、互いにけじめをつけて活動に入るよう促した。そこで、日常の接し方等の様子を垣間見ることができ、子どもへの対応の判断材料となった。また、活動においては、子どもたちが抵抗なく外に出かけられるよう、季節感のある「クリスマス飾り」の材料を探し、館内で制作するという流れで実施した。自然物を利用し、各々が創意工夫をこらして制作する中で、参加者同士が協力・協同して作り上げることができていた。一方、保護者は本事業の事業説明後、パーティーの準備に取りかかった。学び・子育てなど共通点も多く、情報交換の場としても有用で

あった。パーティーでは子どもと保護者の再会、互いの活動の成果から体験の共有、喜びをわかち合っていた。

2. 本キャンプ

本キャンプでは本事業のねらいである、自然体験を通じて幼児の自立心や協調性をはぐくむこと、保護者の実習・講義を通じた自然体験活動の体系的理解に重きをおいている。プログラムについては、下記、表3にまとめたとおりである。

表3 キャンププログラム（本キャンプ）

【子どもプログラム】	
1月12日（土）	1月13日（日）
午前	○起床 6:00
	○『バイキングにさいちようせん!』 7:15～
	○『おもいっきりゆきあそび♪』 8:30～
午後	○受付 12:00
	○『はじまりのかい』 13:00～
	○『ふゆのもりをたんけん!』 13:30～
夜	○『あったかおやつタイム♪』 16:00～
	○『バイキングにちようせん!』 17:15～
	○『やすんだり。あそんだり。』 18:00～ (就寝準備・休憩)
	○『おえかきタイム』 19:00～

【保護者プログラム】	
1月12日（土）	1月13日（日）
午前	○起床 6:00
	○朝食（弁当） 7:00～
	○『スノーシュートレッキング』 10:00～
午後	○受付・子どもとお別れ 12:00
	○『い〜っほcafé』 13:00～ (事業説明・講師紹介)
	○『城國寺にて座禅会』 14:00～ (座禅・作務)
夜	○子ども用のテント設置 17:20～
	○夕食・入浴 18:00～
	○『子育て座談会』 19:30～ (情報交換会を兼ねた座談会)

本キャンプもプレキャンプ同様、受付後、保護者には子どもとお別れの儀式をし、互いにけじめをつけて活動に入るよう促した。宿泊を伴うことから、子どもたちには親に対する依存心を持たないよう、近くにいることを知らせず、自力で2日過ごすようにした。子どもプログラムでは1日目は道具なしの雪遊び、2日目は道具を使った雪遊びを行った。道具の有無によって、活動の幅が広がることの気づき、発見を楽しんでいたと同時に、1人で作れるものだけではなく、仲間と協力する場面を多く見ることができた。

野外炊飯では、包丁、ピーラーを使って材料を切る作業に挑戦した。調理では、1つの活動に集中させることを重視し、全員が材料を切るようにした。スタッフも安全管理に集中するこ

とでケガなく活動を行うことができた。

保護者プログラムでは、1日目は本事業の事業説明・講師紹介後、新たな取り組みとして座禅会を実施した。座禅や作務を体験することで日常には取り入れられること、日常生活に活かせるものという気づきを促した。夜には情報交換を兼ねた座談会を開催し、プレキャンプ後の子どもの様子や成長等、講師・スタッフを交えて情報共有をはかり、交流をさらに深めた。

2日目は保護者にも自然体験活動として、スノーシュートレッキングを実施した。比較的短い時間ではあったが、子どもと同じく雪中活動を行った。その後、共通プログラムであるパーティーは子どもと保護者が同じ場所で食事をとったが、互いに活動した仲間と一緒に達成感を味わっていた。

3. 事業評価

事業評価の材料として、事業後の満足度アンケートと鈴木⁽⁶⁾が作成した「幼児期の感性尺度」を使用した。

(1) 満足度アンケートの結果から

事業後に保護者を対象に満足度を調べた結果を下記、表4に示す。「満足度アンケート」は国立青少年教育振興機構の「教育事業」において用いられているものを使用した。回答者は保護者のため、事前にねらいや活動プログラムについて説明を行った。表4から、全ての設問において満足、もしくはやや満足と回答されており、事業説明において理解を得たこと、参加者自身が目的意識を持って取り組んだことが要因であると推察できる。しかし、自由記述項目に「親ももっと体験がしたかった」、「少し時間が遅れ気味」といった意見もあり、1泊2日の日程に時間的余裕がなかったといえる。

表4 「満足度アンケート」の結果

設問事項	満足	やや満足	やや不満	不満
事業全体を通してはどうでしたか	86.4%	13.6%	0%	0%
事業のプログラムはどうでしたか	81.8%	18.2%	0%	0%
事業の運営はどうでしたか	95.5%	4.5%	0%	0%
職員の指導・助言はどうでしたか	81.8%	18.2%	0%	0%

n=22 (アンケート回収率100%)

(2) 幼児期の感性尺度から

文部科学省は幼稚園教育要領⁽³⁾の表現領域のねらいである「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ」、「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」、「感じ

たことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」の3点は、感性が生きる力の基礎を支え、それを育むことが幼児期に求められていることを唱えている。

これは本事業のねらいとも合致しており、今年度は鈴木⁽⁶⁾が開発した幼児期の感性尺度を用いた効果測定により「大人が誘導しないキャンプ」が子どもの感性にどのような変容をもたらすのか予備的な調査を試みた。幼児期の感性尺度は感性の側面や要素、さらには感性を構成する3つの因子「独自の感受と創出」「能動的な応答」「情緒的・道徳的な共感」を明らかにしたものであり、質問項目ごとに、それぞれ「まったくあてはまらない」(1点)から「かなりあてはまる」(5点)の5件法で回答を求める3因子26項目で構成されている。

対象は保護者の参加者で、調査時期はプレキャンプの事前 (Pre)、プレキャンプの2週間後 (Pos1)、本キャンプの2週間後 (Pos2) の3回測定した。なお、事後の調査については家庭での生活の様子を2週間観察してもらい、その後に記入してもらった。経過観察の期間 (長さ) については、事業担当スタッフで検討し、非日常の体験から気づき、ふりかえり、一般化して日常生活へむかう「体験学習サイクル」を踏まえ、2週間前後の時間を要するのではないかとこの仮説のもとに決定した。

有効回答を得られた参加者9名 (年長男子3名、年長女子1名、年中男子3名、年中女子3名の保護者) であった。

本調査は、事業体験前に比べて、体験後に得点の平均点が統計的に増加していれば、事業内容が子どもの感性の育ちによい効果が与えられていると考えられる。統計には平均値の差を検定するt検定を用いた。検定結果を下記、表5に示す。結果としてPre-Pos1間は「独自の感受と創出」と「情緒的・道徳的な共感」が統計的に有意な値を示しており、Pre-Pos2間は同因子が有意傾向を示している。

「独自の感受と創出」とは、子どもたちをとりまく環境に存在する主体的な意思に基づいて決定していく独創的な行動と捉えることができ、「感受すること」と「表現すること」と考えられる。これより、自然の中での活動が幼児の感受性の高まり、それを形にして表現することができるようになったと推察できる。

表5 「幼児期の感性尺度」の結果

	Pre		Pos1		Pos2		Pre-Pos1	Pre-Pos2
	M	SD	M	SD	M	SD	t-score	t-score
独自の感受と創出	46.67	8.37	51.22	9.31	51.00	8.03	4.43**	3.30*
能動的な応答	32.00	5.98	33.44	3.94	32.67	5.17	1.51	1.07
情緒的・道徳的な共感	17.22	1.99	19.44	2.88	18.44	2.74	4.06**	2.63*

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

また、「情緒的・道徳的な共感」とは、他者の中で生きる自分をまとめた項目であり、共感とは他者に感情移入することによって他人を顧慮する態度であるが、同時に良心や協調といった社会的な感受性に支えられている。これは、はじめて出会った集団の中で子どもたち同士が積極的に交流し、自身だけではなく他者の立場も顧みることができるようになった傾向がうかがえる。

しかしながら、本調査は有効回答が少ないため、統計的な信頼性は低く、今後の検証が必要であると考えられる。

IV. おわりに

1. 成果と課題

- (1) 事業の柱（ポリシー）については、今後も徹底してブレない方がいい。「大人が決めない」「自立」「生きる力」。
- (2) 参与観察の面から、夜泣き、ホームシックの症状が出ていた子どもにも、スタッフは積極的に介入せず、ひとりで乗り越えることを促したことで、自分自身を見つめ直し、成長のきっかけになった。
- (3) 子どもプログラムについては、プレキャンプの季節感を重視した導入、本キャンプの道具の有無により変化をもたせた雪中活動によって子どもたちの発達段階を踏まえて想像力・創造力を引き出すことができた。
- (4) 異年齢集団の中で子どもたちが自主的にかかわりを持ち、交流していたことはよかったが、年長児と年中児でできることの違いや差は大きいと改めて感じた。それを考慮したプログラムの考案が必要である。
- (5) 子どもたちを誘導しないがゆえに、子どもに対する言葉がけの難しさを感じた。
- (6) 保護者プログラムについては、幼児教育・野外活動の有識者である講師がかかわったことでプログラムが充実した。ま

た、カウンセリング指導等、スタッフトレーニングにもつながった。

- (7) 保護者と子どもが会う、会わないについて、より明確な伝え方をしなければならない。全体で考える（話し合う）時間をとったが、それを無視している人もいた。その点についてどうするかを検討する。（親子別プログラムの効果を検証する）
- (8) プレキャンプと本キャンプにつながりをもたせるため、子どもへのスタッフの介入や配置の仕方はどこまでが適当なのか検討する必要がある。
- (9) 活動、生活のサポートとしてスタッフの拡充が必要である。また、少ない人員で実施している民間の手法等も積極的に取り入れる必要がある。
- (10) 幼少期の子どもは調査用紙による効果測定が困難なため、今年度は保護者のみに実施したが、事業評価の方法について検討する必要がある。また、質問項目、尺度も併せて検討する必要がある。

2. 今後の展望

本事業は幼児対象事業として、子どもと保護者、それぞれの学びや気づきに重きを置き、双方が互いに成長、理解しあうことをねらいとしてプログラムを構成した。今後はこれまで蓄積したデータ、実践を踏まえ、自然体験プログラムの展開方法や評価方法について、考案し、先鋭的なモデルプランとして普及、推進を図っていきたい。

引用文献等

- (1) 教育課程審議会、「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について—最終報告—」、文部科学省、1997
- (2) 中央教育審議会、「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」、文部科学省、2005、
- (3) 文部科学省、「幼稚園教育要領」、2008

- (4) レイチェル・カーソン、「センス・オブ・ワンダー」、初版、上遠恵子訳、新潮社、1996、pp. 23
- (5) プレキャンプでは、スタッフの体制上、担当1人で2人の子どもを見るようにした。
- (6) 鈴木裕子、「幼児の感性を具体化する試みー幼児期の感性尺度の開発を手がかりとしてー」、保育学研究、第47巻第2号、2009、pp. 28-38